

※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

自由討議

木村：そうしたら、まだ質問はあるかもしれませんが、時間にもなってきていますので、いつもの通り、今日の話聞いて、いろいろディスカッションしてみて、発見したこと、感じたことを各自付箋に書いてください。2分くらい時間を取りますので、お願いします。その後共有して、最後に柳下先生にそれらを見てコメントしていただこうと思います。じゃあ、少し時間取ります。

(各自付箋に記入)

木村：そろそろ大丈夫ですか？ では、たぶん皆さん予想通りと思いますけれども、こちらから貼っていってもらいます。Dさんからどうぞ。

D：コンパクトシティってぼんやりと聞いたことはあったのですが、日本でも実際に移されているということと、実際にどうなっているのかということは、今回初めて知りました。

あと、茅恒等式という指標、指標というのかな、の存在も今回初めて知りました。

あとは、個々の技術の良し悪しではなくて、都市のあり方や産業構造という次元で考えるべきということが分かりましたし、その産業構造というのは、私もまったく違う領域で同じことを考えていたのですけれども、環境とかそういう領域でも考えられていて、ああ、結構同じようなことを考えているのだなと思いました。以上です。

木村：はい。じゃあ、Gさん、どうぞ。

G：私も、茅恒等式の、CO₂排出量を考える際に人的活動も考慮に入っているということは初めて知りました。

日本は省エネの技術がすごく進んでいるけど、社会構造の改革が遅れていて、まだ国民の意識が足りていないなと思いました。

あと、エネルギー供給量あたりの炭素原単位が、原発停止からの急上昇が本当に大きく出ていたので、原発に依存したくなる気持ちも分からなくはないなと思いました。以上です。

木村：はい。じゃあ、Cさん。

C：自分の中で一番大きかったのは、地球温暖化問題を考えるときに、省エネの車ができるとか、そういった技術を求めがちだったのですけれども、それよりも使うプロセスや構造の見直しのほうが大事だというお話があって、それが自分の中で一番新しかったです。

コンパクトシティとかそういった話で思ったのが、CO₂を削減するというのを、まあ皆重要だと思っているとは思いますが、それが長期的に大事だということについての理解はあまり深まっていないだろうと思ったので、そこが重要だと思いました。

その中で、土地の広さとか、そういった豊かさが、今まで行きたいと思っていた方向と変わってきたりするのかなと思って、そういうことについても考えるのが大事なのかなと思いました。以上です。

木村：はい。じゃあ、Bさん。

B：Cさんのこれと近いと思うのですが、日本の社会構造から見直す必要があるなと思いました。日本は、技術がすごく進んでいると言われてはいますが、それに頼るのではなくて、まあ技術向上も大事ですけど、それと同時に、よりCO₂を排出しないような理想的な社会構造にするために、私たちが動いていかなければいけないなと思いました。

それに付随して、先ほど富山の例を説明してくださいましたが、私が最初に疑問に思ったのが、たぶんコンパクトシティって勝手にそれぞれ自由気ままにやってしまったら、そこで不具合が生じると思うのですが、先ほどの富山県は、あ、富山市でしたっけ？

柳下：富山市圏ですね。都市圏。そこで一体に考えるということです。

B：そういうある程度の、個別じゃなくて、全体が力を合わせてやっていけば、今は試験段階だと思うのですが、それが今後ずっと現実的に使えていくのではないかと思います。

それと、グラフを見て思ったのが、これは言い方があれですけど、「原発を使わないとCO₂上昇？」って書いたのですが、原発がほぼゼロになった段階で一気にCO₂量が増えているのを見ると、確かに原発にはリスクもあると思うのですが、CO₂を削減するという点では合理的な発電方法だったのだなということを、実際に止まった状況のグラフを見て痛感しました。

最後に、「地球温暖化を食い止めることは困難？」と書きました。今まで、ざっくりと、皆が協力していけばなんとかなると思っていたのですが、社会構造とか、全体的に見て、やはりなかなか難しいのではないかと、痛感した回でした。以上です。

木村：はい。Fさん。

F：他の方とかぶっているところがあるのですがけれども、よりいい車を作るとか、そういう細かい技術よりも、社会の都市構造自体を変えていかないと地球温暖化にはあまり効果がないというか、今、そういう考え方がされているのだな、というのが今日一番の驚きでした。

他の国の都市構造の話もあったのですがけれども、都市計画が国によって結構性格が違っていて、日本はいろいろなところに家が分散していたり、そういうのがあるのだなというのが興味深かったです。

コンパクトシティという言葉は、私は今日初めて聞いたのですがけれども、そういう研究があって、車に依存しないような社会を作ることが大切なのだなというのが今日一番の発見でした。以上です。

木村：はい。じゃあ、Eさん。

E：私も、日本の政策の特徴として、全体を変えることに弱いのだなと。全体を変えていけるようにしないといけないという課題を初めて分かりました。

あと、日本の技術の開発力はすごいのだなと思いました。グラフを見て、自動車とかもすごく改善されていたので、そこは自信を持って、もっと伸ばしていければいいのではないかと思います。

あと、CO₂排出量の算出方法（茅恒等式）と、それにGDPが関わっていたと思うのですがけれども、やはりGDPじゃちょっと正確ではないなと感じました。

気候変動問題に対する国際政策の歴史が30年しかなくて、その中でいろいろ議論しているというのは、まだ歴史が浅いから何とも言えないのではないかなと思いました。

あと、地球温暖化問題と貧困問題のバランスを考えていかなければいけないと思いました。以上です。

木村：はい。じゃあ、Aさん。

A：私は、ヨーロッパみたいなコンパクトなシティというのは、存在は知っていたのですがけれども、景観がきれいだからそのためにやっているだけかなと思っていたので、それが実際にCO₂排出量とか、地球温暖化とか、環境にとってとてもいいことだと知ったので、ちょっとへーって感じでした。

私も、温暖化となるとつい技術面の数字とか、この技術によって何々するための排出量が減ったみたいな、そういう話ばかり気にしていたので、活動全体によっても影響が

結構大きいということを知って、ちょっとハッとさせられました。

あとは、他の回がずっと原子力の話だったので、今回は他のエネルギーに関する話だったので、結構興味深かったなという感想です。

木村：ありがとうございました。

柳下：最後の感想の意味が分からなかったのですが。

木村：今までのテーマは、結局原子力が中心になってくるのですよ。そういうことがあって、という話だと思います。

では、こういう感想が出ましたけれども、これを受けて、柳下先生に締めていただければと思います。

柳下：締められるかどうか分からないのですが、共通的に分かっていたのは、日本は技術力で何とか勝負しようという発想が非常に強かったのですね。まあ、これは温暖化対策だけではなくて、環境対策全般に言えるのですけれども。技術力世界一なのだから、ということで、怠っていた可能性はあります。

ドイツの人たちが非常に癩に障るようなことを言うのですが、1980年代くらいまでは、日本は世界のトップを走っていたと。その後、90年代にヨーロッパ諸国にどんどん抜かされていったと。その抜かされたものは何かというと、技術ではなくて、技術の使い方であったり、その技術を必要とする主体側の行動であったり、そういう工夫がだんだん主流になっていくのだけれども、日本はいつまでも技術だ、技術だと言っている。それ自体が逆転現象を起こしたのだ、と彼らは言っています。

確かに、1990年くらいの国際的な様々な統計を並べてみると、日本は優等生です。ところが、日本はその後ずっと横ばいなのです。ヨーロッパ諸国が上がっていく中、日本は下がって行って、ついに2010年くらいに逆転をされてしまいます。特にドイツとかに逆転されてしまったのです。向こうの技術のほうが優れていたからかということ、そうではありません。単体の技術であったら、フォルクスワーゲンとトヨタを比べて、家電メーカーの1つ1つを比べて、絶対に負けるとは思わない。ただ、それをトータルにした社会の統計で見ると、逆転が起こっているのです。そのことに気がつかなければいけない。

じゃあ、どうしたらいいのだろう。工学部の人たちが悪いのか？ 私は、社会科学をやっている人間は、工学部や自然科学の人たちが何をやっているのかということを知らなければいけないと思います。それを知って、正々堂々と批判できなければいけない。工学部出身の技術者に「自己批判しろ」と言っても、自己批判するとは思えないので、それも新しい源泉なんだと思わせる仕掛けが日本の社会にないといけないうのかなという気がしているのですけれども。どうでしょうか？

木村：それはあると思います。お互いに溝を作っているのです。

柳下：そうですね。そこが大きいような気がしました。

今回の東京の豊洲問題を見ていて、本当にそう思いました。建築とか土木の人たちは、「俺たちが一番詳しいのだから」と言っている。上にいる市場庁の人たちは、たぶん法学部とか経済学部出身で、技術のことは分からない。めくら番と言うと怒られてしまいますが、分からないと言ってハンコを押したわけでしょう。皆処分されたけれども、よくあそこに都知事が切り込んだなと私は思います。まあ、あれは特殊な問題かもしれないけれども、ある種日本の病気の典型的な姿があそこに見えてしまったわけです。

工学部の人間は、自分がやっていることは自分たちが一番詳しくて、自分たちが最善を尽くしていればいいのだ、と考えていることが多いけど、実は大きなところでそれは間違っているよと的確に指摘して、それを凌駕するような知恵をちゃんと授けられる構造になっていないと、「技術のことは分かりませんからお任せします」でなんとなく進んでしまうと。そういう問題が共通的にあったのではないかと思います。

それが今、都市という場で、やっと日本が気づいてきたというのは、少し明るい兆しだと思います。東京や大阪に住んでいるとなかなか気がつかないのですが、地方都市は、このままでは人口が減ってしまう、そのときに財政がおかしくなってしまう、と非常に危機感を持っています。「環境」というフレーズは、取り組みを正当化する非常に便利な言葉だと思います。私は、市長さんの本音は環境ではないと思っているのです。ところが、環境とかエネルギーとかそういうことを言うと、非常にインテリに見えるし、前を向いているように見えるじゃないですか。「お金が」と言うと、どうしても、人件費を減らせとか、そういう話になりがちです。そこは、私は、お互いに上手にいいところを使い合っていけばいいと思っています。

日本がやっとそういうことに気がついたということは、あなた方もぜひ知っておいてほしいと思います。今後、いろいろな学問分野や、研究、あるいは若者が地方都市でもっと知恵を出すとか、そういう取り組みが進んでいけばいいなと思います。東京の本社的な発想でものを見るだけがいいのではないと私は思っていますので、そういうところに気がついていただいたのは大変ありがたいなと思います。

今までは、茅先生というエネルギー分野での大先生がずっとリードしてきたのですが、やはり 20 世紀の先生であって、21 世紀の新しい発想、鼓舞していくような指標づくりが大事だと思うのです。あなた方の新しい発想が大事じゃないかと思うので、ぜひ頑張ってもらいたいというのが感想です。

以上です。ありがとうございました。

木村：では、これで柳下先生の講義は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました

いました。(拍手)